



泰山木

ホームページ

<http://www.city-takaoka.jp/bakurou/index.html>

数十年ぶりの来校者

安田 裕子

五月初旬になると田んぼに水が張られ、田植えが始まります。初夏の日差しを受け、まばゆいばかりに輝いている田んぼは、夜になると、まるで水鏡のように家々の明かりをぼおっと水面に映し出し、幻想的な雰囲気醸し出します。この時期の田園風景はことのほか美しく、よくぞ日本に生まれけりと思えます。

さて、博労小学校に赴任して1か月が過ぎました。3年ぶりの博労小学校ですが、当時2年生だった子どもたちは今や6年生となり、児童会や運動会など学校生活の中で全校児童を引っ張っているのを見て、月日の流れを感じます。ときどき3年前にタイムスリップすることがあり、先日も「創校110周年」という言葉を聞いたとき、平成13年の創校100周年記念行事を思い出し、もう次の節目を迎えるのだと感慨深いものがありました。

創校100周年記念の年は、運動会を皮切りに全校一丸となって博労小学校の伝統と歴史を振り返り、未来につなぐためにいろいろな取り組みを行いました。学校の歴史をひも解き、その歩みを知るとは、地域やPTA、教職員の学校教育に対する思いの深さを知ることとなり、私にとって大きな財産となりました。

その中で、特に印象に残っていることがあります。それは、前日の記念式典が成功裏に終わり、その余韻に包まれていた翌朝のできごとです。1階の玄関前に、記念式典に参加したいといっている二人の来校者がありました。二人は母と息子であり、共に博労小学校の卒業生でした。すでに高岡には身寄りもなく、昨晩はホテルに泊まったとのこと。記念式典には会場の関係上、一般の卒業生の方は招待しておりませんでした。母校の創校記念式典にぜひ参加したいという一途な思いで東京から駆けつけられたのでした。二人の話は次のようなものでした。

「若いとき、生活の糧を求めて一家を挙げて上京したけれども、大変苦しい毎日だった。そんなときい

つも『博労小学校の卒業生』であることを思い、がんばってきた。母校を誇りに思う気持ちが苦しいときの自分を支えてくれた。博労小学校は何をしても高岡一番の学校であった。」

母の在学時は岡村直吉校長先生、息子は島木茂樹校長先生であったことをはじめ、泰山木を植樹したことや校歌ができたことなどの話をうかがい、当時の記憶の鮮明さに驚きました。

式典が前日終わったことを聞いてひどくがっかりした様子の二人を見て、せめて、当日披露した学校の歴史を映像で綴った画面を見せてあげたいと思いました。また、年老いた卒業生が博労小学校を再び訪れ、その歴史を振り返るとい劇をした4年生の子どもたちに、劇の話そっくりのこの二人を会わせたいと思いました。

二人は、古い校舎や当時の学校の様子が映し出される画面を食い入るように見つめ、4年生の子どもたちが覚えたばかりの「同窓会の歌」を披露すると、一緒に口ずさみ、歌詞のとおり楽しい学校生活だったと話しておられました。

卒業して何十年も経つのに母校の創校記念式典に参加したいと思わせたものは、一体何なのでしょう。苦しかったときに自分を支えてくれたという学校とは、一体どのような教育を行ったのでしょうか。あの日以来、ときどき自分に問い返しています。

今年の五月は、女子高生が殺害されるという心痛む事件等が相次いでおります。田んぼが水をたたえ、変わらぬ美しさを見せてくれているように、どの子ども本来もっている「よりよく生きたい」という思いは変わらないと思います。子どもたちが人間性豊かに、たくましく生きていくために、そして、大人になったとき、小学校時代は楽しかった、よい学校だったという思いや誇りをもって振り返ることができるよう、校訓の「最善の努力」と「真剣な実行」を心がけたいものだと思っております。